

聖カスバート崇拝の発生に関する一考察

— 二人の聖人とノーサンブリア王権 —

白井 直美・遠山 茂樹

Cuthbert, a bishop of Lindisfarne, was one of the most important saint in the seventh century and a key figure in the ecclesiastical and political context of Northumbria. He was venerated for the christian virtues and the merit of faith. According to the decision of the synod at Whitby in 664, he led the community of Lindisfarne to accept the Roman Catholic rule and he consecrated as bishop of Lindisfarne in 685.

After his death, his community enshrined him and vigorously promoted his cult in Lindisfarne opposed to Wilfrid's threat. Wilfrid, who was also seen as saint, ruled the Northumbrian church and had a lot of landed possessions and ecclesiastical powers, but he quarrelled with kings to expel twice. Through the development of the cult, the close connection was established between the community of Lindisfarne and Northumbrian royal family. Both of them had been bothered by Wilfrid, the community was eager for protections of the king and the king intended to set up Cuthbert as rival saint against Wilfrid. It was essential for them to collaborate each other. This connection prevented Wilfrid restoring his authority. As a result, the cult of Cuthbert could enhance the royal power with increasing the authority of Lindisfarne.

はじめに

7世紀、イギリス・ノーサンブリアに中世を代表する二人の聖人が登場した。一人は聖カスバート（Cuthbert）（635－687）であり、もう一人は聖ウィルフリッド（Wilfrid）（634－709）である。この二人は共にノーサンブリアに生まれ同じ時代を生きたが、アイルランド教会の教えに従って終生厳格な修道生活

を続けたカスバートと、ローマ・カトリック教会の実力者として莫大な財産と権力を手に入れたウィルフリッドとは、全く対極的な存在であった。しかしながらこの二人は共に死後「聖人」として奉られた。カスバートは司教を務めたリンディスファーン（Lindisfarne）で、ウィルフリッドは晩年を過ごしたリボン（Ripon）で、それぞれの後継者たちによって奉られ信仰を集めたのである。7世紀に急速なキリスト教化が進んだブリテン島では、ローマ以来伝統的にみられた、殉教による聖人化に該当する、土着の聖人を輩出する事が困難であった¹⁾。そのため人々は、生前の功德や業績によって尊敬を集めた聖職者や、教会の建設者、キリスト教化に尽力した世俗の王などを聖人化したが、その中には崇拜の担い手たちによって意図的に起こされた聖人崇拜も少なくなかった。人々は何故聖人崇拜を必要としたのだろうか。崇拜発生の背景には何があったのだろうか。本論文では中世ノーサンブリアを代表する聖人カスバートの崇拜を例に取り、彼の崇拜の発生と発展に影響を与えたもう一人、聖人ウィルフリッドとの関係を視野に入れ、カスバート崇拜発生の要因を7世紀－8世紀ノーサンブリアの政治的・宗教的背景から考察する。

7世紀初頭ブリテン島北部、ハンバー川以北の広大な地域にはアングル人のふたつの王国があり、北はベルニキア（Bernicia）が南はデイラ（Deira）が統治していた（地図参照）。両王国は対立を続けていたが、592年頃ベルニキアの王エセルフリース（Aethelfrith）（在位592/3－616/7）が両国を統合し、ノーサンブリア王国が成立した。さらにオズワルド（Oswald）（在位634－642）の治世、ノーサンブリアはハンバー川以南にも領土を拡大し、彼はブリテン島を治めた王の一人としてその名を知られ、後代にはブレトワルド *bretwalda*（ブリテン島を治める者）と称された²⁾。また彼は635年ノーサンブリアのキリスト教化を進めるために、スコットランドのアイオナ（Iona）修道院からエイダン（Aidan）を司教として招き、王宮のあるバンバラ近くの小島に修道院を設立した³⁾。この時建てられたのが後にカスバートが学び、司教を務める事となるリンディスファーン修道院である。エイダンはこの地で熱心な布教活動を展開し、リンディスファーン修道院は北部のキリスト教化の拠点として繁栄した⁴⁾。しかしエイダンを輩出したアイオナ修道院は、アイルランドからスコットランド

ヘキリスト教を伝えたコロンバ（Columba / Columcille）が、563年に設立した修道院であり、独自の規律に従うアイルランド修道制が成立していた。そのアイオナからエイダンに続いて、フィナン（Finan）、コルマン（Colman）がリンディスファーン司教として招かれた事によって、彼らの布教を通じてノーサンブリアにはアイルランド教会の教えが浸透した⁵⁾。しかしこの状況は、同時期にブリテン島に到達していたローマ教会との対立を生んだ。597年にブリテン島に派遣された聖アウグスティヌスから始まるローマ教会による布教活動は、カンタベリーを拠点として南のケントでは成功をみたものの、ノーサンブリアでは普及には至らなかった⁶⁾。

ブリテン島のキリスト教化がアイルランド教会とローマ教会という、異なる教えと伝統を持つふたつの教会によって進展した事は、オズワルドの弟オスウィ（Oswiu）（在位642－70）の治世に、両教会を衝突に至らせた。復活祭算定方法の差異をめぐり、アイルランド教会に従う王と、ローマ教会に従う妻エアンフレッド（Eanflaed）の意見が対立し、664年ウィットビーで両教会の代表を招き議論の場がもたれた。両者は激しい議論を展開したが、オスウィ王はローマ教会の方式に従う事を決定した⁷⁾。この議論の場においてアイルランド教会の代表コルマンを論破したのが、ローマ教会の代表であり後に崇拜の対象となる聖人の一人、ウィルフリッドであった。ウィットビー公会議の結果ノーサンブリアはローマ教会の主導の下で教会編成が行われ、この決定を不服としたコルマンはリンディスファーン司教を辞しこの地を去った⁸⁾。指導者を失い脆弱となったリンディスファーンは司教座の地位を奪われ、この後681年に司教座に復帰するまで苦難の日々を過ごす事となった。この公会議の決定によるノーサンブリア教会の大変革は、カスパートとウィルフリッドの生涯におけるひとつの転機となった。彼らはこの公会議を境に歴史の舞台に登場するのである。

1 教会とノーサンブリア王権

前述のようにウィットビー公会議は復活祭の算定法を巡って開催されたが、これは表向きの理由であり、むしろ両教会にとってはノーサンブリアでの覇権を占う意味を含んでいた。そしてその背景には、教会と王権の密接な結合関係がみられた。664年以降ノーサンブリアはカンタベリー大司教テオドール

(Theodore of Tarsus) の指導に従い、ヨークを新拠点とした新しい教会制度に組み込まれていくが、その中で王権との結合により頭角をあらわすのがウィルフリッドである。

ガリアに渡りローマ教会の教えを学んだウィルフリッドは、オスウィの子アルフリース (Alhfrith) に認められ、公会議でローマ側の代表をつとめた。その後もアルフリースの推薦を受けて665年ガリアで司教に叙階され、669年に帰還しノーサンブリア全域を司教区とするヨーク司教に就任した⁹⁾。アルフリースはウィルフリッドを積極的に登用し、彼にリボン (Ripon) 等の土地を与えるなど強力なパトロンであったが¹⁰⁾、父オスウィと対立して政治の場を去っている¹¹⁾。しかし既に広大な司教区を獲得し、かつ個人所有の土地を次々に得たウィルフリッドの勢いは衰えることなく、ヨーク司教時代に彼の権威は最盛期をむかえた¹²⁾。

しかし678年、ノーサンブリアの情勢は大きく変化する。オスウィの後を継いで王となったエッグフリース (Ecgrith) (在位670-85) が、ウィルフリッドを罷免し国外に追放したのである。これにより彼の広大なノーサンブリア司教区は分割され、デイル司教区にはボサ (Bosa) が、ベルニキア司教区にはエータが、リンドシー (Lindsey) 司教区にはエアドヘッド (Eadhaed) が司教として選出された。さらに681年に再分割が行われヘクサム (Hexham)、リンディスファーン、リンドシー、リボン、アベルコーン (Abercorn) の5つの小教区が成立した¹³⁾。このウィルフリッドの追放による教区分割は、拡大しすぎた彼の権力をそぐと同時に、教会に対する王の発言権を増大する契機となった。これにより、教会にとって王権と友好的結合関係を保つ事は、彼らの存続のために不可欠となり、この教区分割に際して大司教テオドールは、王に恭順な者を選んで新司教に任命し、王への不服従を見せた司教はただちに罷免された¹⁴⁾。他方ノーサンブリアを追放されたウィルフリッドは、ウェセックス (Wessex) 王に接近し、この地で積極的な布教活動を行った。彼の功績を見たウェセックス王は彼にパガム (Pagham)、タンメーレ (Tangmere) とワイト島 (Wight) の4分の1の土地等を与え、彼は各地に修道院を建設した。さらに彼はウェセックス王のカドワラ (Caedwalla) をパトロンにつける等、他国の王権と結ぶ事で力を蓄え、ノーサンブリアへの帰還の機会を伺っていた¹⁵⁾。

同時期、前述のウィルフリッド追放に伴う教区分割によって再び司教座と

なったリンディスファーンでは、エータ（Eata）が新司教に就任し王権や大勢に恭順な彼の下で権威を回復した。エイダンの弟子であったエータは、メルローズ修道院（Melrose）で学び修道院長を務めた人物である。メルローズはカスパートが修道生活を開始した場所であり、カスパートはここでエータやボイシル（Boisil）からアイルランド修道制を学んだ¹⁶⁾。エータは664年頃にカスパートを伴ってリンディスファーンに移り、ウィットビーでの決定によってローマ教会に従うことを余儀なくされ、混乱するリンディスファーンの修道士たちを、カスパートと共にまとめローマ教会の教えに従っていくように導いた¹⁷⁾。一方でカスパートは676年頃からリンディスファーンから少し離れた小島ファーン（Farne）に庵をむすび、隠修士的修行の日々を送っていた。しかし684年の教会会議に臨席したエッグフリースは、カスパートに対し司教就任を要請した。修道生活を重んじて初めはそれに応じなかったカスパートであったが、王や仲間の修道士の説得を受けて685年にリンディスファーン司教に叙階され、エータはヘクサム司教に移された¹⁸⁾。このカスパートの叙階は、司教選出に関する王の発言権の強さや教会への影響力を物語る。しかしカスパートは司教就任後も王権との過度の癒着を避け、一定の関係を保ち続けた。また彼は司教として聖書の教えに従って人々を導き、飢える者や貧しい者に喜捨を続けるなど奢らず質素であり、その有徳さから人々の手本となり尊敬を集めた¹⁹⁾。カスパートは2年間司教を務めて退き、ファーン島の庵に戻った後、687年3月20日にこの世を去った。

同じ頃ウィルフリッドは、エッグフリースの異母兄弟のアルドフリース（Aldfrith）（在位685/6－705）が治めるノーサンブリアに帰還を果し、686年のエータの死により空位となったヘクサムの司教に就き、687年のカスパートの退任後はリンディスファーン司教を兼任した。さらにヨークトリボン司教区も手に入れると、ウィルフリッドはノーサンブリアでの権威を回復した²⁰⁾。しかし彼はマーシアのアエセルレッド（Aethelred）から土地を得るなど、他国の王権と関係を持ち続け、国外に多くの所領を獲得したため、アルドフリースは691/2年に彼の国内の所領を没収し、再び国外追放に処した。ウィルフリッドは王が705年に没するまで帰還を許されなかったが、帰還後はリボンとヘクサム修道院への復権を認められヘクサム司教に就任した。彼は晩年もマーシアな

ど他国の王家と交流を持ち、所領を保持し続けたが、ノーサンブリア王権との関係を修繕できぬまま、709年に莫大な土地と財産を甥と後継者たちに残し、マーシアのオンドル（Oundle）修道院で没した²¹⁾。

しかしウィルフリッドの75年に及ぶ浮沈の生涯を通じ、先の王権と教会の結合関係についてひとつの疑問点がもちあがる。ウィルフリッドの教会権力や土地所有がいかに莫大であったとはいえ、既に教会への強固な影響力を持った王権が、二度に渡って彼を追放しなければならなかったのは何故だろうか。また彼の伝記に従えばエッグフリースは彼の殺害を計画し、アルドフリースは軍により彼を脅かしたという²²⁾。ウィルフリッドがこれ程までに王によって圧迫されたその背景には、どのような理由があったのだろうか。

第一の理由として、ウィルフリッドが国内外に所有した土地をめぐる対立が考えられる²³⁾。彼は王や王族から多くの土地や教会を与えられ、一時それはノーサンブリア全域を覆い周辺国に及んだ。さらに彼は、土地を通じて他国の王族と親交があり、特に長年に渡ってノーサンブリアと領地を奪い合ってきた、マーシアに通じていた事は、王にとって最も危惧すべき事態であった。また国内の彼の所領に対しても、彼への批判や妬みは激しく、常に争いの元となり続けていた²⁴⁾。アルドフリースは追放時に彼から国内の土地を没収したが、国外の所領を失わせる事はできず、結果ウィルフリッドは国外の所領で勢力を巻き返し、ノーサンブリアに帰還している。この事は国外に所領と政治的パトロンを持った彼にとって、追放が効果的でなかった事を意味している。反対に追放は彼を敵国の王族に接近させる事となり危険を増したのではないか。それでも王は何故彼を追放したのだろうか。

二度に渡るウィルフリッド追放のもうひとつの理由は、彼とノーサンブリア王権との結合関係に内在していた。前述のようにノーサンブリア王国はデイラとベルニキアの王家が合併して成立したが、王位はベルニキア王家のエセルフリースの一族が、616/7-633/4年のデイラのエドウィン（Edwin）の治世を除き、約100年間に渡って継承した。しかしこの時代は王族内でも陰謀や暗殺が横行し、王位継承をめぐる抗争が絶えなかった。王家の混乱は政治や社会に影響をきたし、当時王家にパトロンを持つことが不可欠であった司教や教会関係者たちも、必然的にそれに巻き込まれていった。おそらくウィルフリッドも、

このノーサンブリア王家内の争いに巻き込まれたのではないだろうか。

二つの王国を統合しノーサンブリア王の統治が開始されても、両国の結束は脆弱であり、オズワルドの死後デイラはベルニキアから独立し、デイラ王家のオズワイン（Oswine：644－651）が即位し混乱が続いていた。一方でエセルフリース一族の間でも王位継承をめぐる対立が生じていた。オズワルドは死後息子エセルワルド（Oethelwald）を王にする事を望んでいたが、オスウィはそれを退け自分が王となり王位はオスウィ家に移った。オスウィは651年にデイラ王オズワインを討ち再び両国を統合したが、彼はデイラを直接統治する事を避け副王を派遣して治めさせるようにし、甥のエセルワルドが副王に任ぜられた。次に息子のアルフリースが副王に就いたが、彼はデイラの独立派に力添えをし父オスウィからの独立を企てた²⁵⁾。加えて彼は早くからローマ教会に傾倒し、665年には父の言い付けに逆らってローマへ赴き、その旅路でウィルフリッドと出会い、彼のパトロンとなった。その後もオスウィの支持でヨーク司教に就いていたチャド（Chad）を退けて、ウィルフリッドをその座に据えるなど²⁶⁾、父への反抗を繰り返したために政治の場から追われた。ここにウィルフリッドの運命を大きく変えた要因があったと推測できる。彼の出世は、王の息子であるアルフリースの強力な後ろ盾をなくしてありえなかったが、反抗的な息子と野心的な司教の結合はオスウィを脅かした。それ故にアルフリース失脚後も衰えぬウィルフリッドをエッグフリース、次のアルドフリースは危険視したのではないか。さらにウィルフリッドはアルフリースのデイラ副王時代に、リボンなどデイラ領内の土地を与えられ、またアルフリースがデイラ王家と懇意であったため、彼もまたデイラ王家と結びつきを持っていたようだ²⁷⁾。これらを考慮するとウィルフリッドの追放は、アルフリースやデイラ王家等、オスウィ家の王たちが対立関係にあったノーサンブリア国内の勢力と彼との結合関係に原因があった。そして敵対者と結合していたからこそ、彼が土地や権力を増大する事に王は脅威を感じたのである。彼の追放は、王を脅かす国内の彼の共謀者との関係を断ち切る事を目的としてなされたのだ。

こうしたノーサンブリア王家内の争いに絡んだ王族との結合の問題は、頑なに権力や地位を拒んだ、世俗とは無縁のカスパートさえも巻き込んでいった。彼はある時オスウィの娘でエッグフリースの妹の、ウィットビー修道院長アエ

ルフレッド (Aelfflaed) から、子のいない兄エッグフリースの後継者に関して尋ねられる。その際カスバートは次の王となるべきは王の異母兄弟で、当時アイルランドに追放されていたアルドフリースであると答えている²⁸⁾。彼がアルドフリースの名を挙げた事はアエルフレッドを驚かせたが、オスウィの血を引く王子であるアルドフリースは、帰還を許され王位継承を認められている。この話はカスバートが、王家から王位継承に助言を求められるほどに信頼を得ていた事を示唆するだけでなく、アエルフレッドが彼に王位を継ぐべき者を尋ねる事で彼のエッグフリースへの忠誠心を試した事を伺わせる²⁹⁾。一方エッグフリースは前述のように、カスバートの司教就任を熱心に要請する等、彼の徳や人柄を高く評価していた。さらにエッグフリースが685年ピクト人との戦いに際し司教就任直後のカスバートを呼んで、戦いに関して彼の意見を求めている事³⁰⁾、また彼がカスバートに対しクレイク (Crayke)、カーライル (Carlisle)、カートメル (Cartmel) やヨークの一部の土地を与えている事は³¹⁾、王がカスバートの王家への忠誠心を認めて、彼を信頼していたことを物語る。そしてこれらはウィルフリッドが政敵と結んで、王の信頼を裏切った事の反動であったともいえるだろう。王は教会との密接な結合をなすために、司教として修道士として人々から尊敬を集め、また世俗の権力や政治争いに関与しないカスバートを支持した。そして王が積極的にカスバートを推し、政治の場に引き出すことで彼をウィルフリッドの対抗馬にしたのである³²⁾。この事はカスバートの死後生じた崇拜によって一層明らかになった。

2. カスバート崇拝の発生

カスバートがファーン島の庵で没した後、リンディスファーンの修道士たちは彼の遺体を船に乗せ、リンディスファーンに運んだ。そして彼の遺体は清められ、聖職服をまとい、埋葬布に包まれて石の棺に納められた後、聖ペテロ教会の祭壇右手に埋葬された³³⁾。この際彼の遺体は、生前であったならば彼が着る事を拒んだであろう高価な衣装を着せられ、様々な副葬品と共に棺に納められた。こうしてリンディスファーンの修道士たちは彼を聖人として奉り、彼の墓所には聖人の加護を求めて多くの人々が訪れるようになった。しかしカスバートは生前、遺体を長く厳しい修行の日々を過ごしたファーン島に埋葬され

る事を望み、また死後奉られる事で彼の墓所に、罪を逃れようとする罪人が集まる事を恐れて、華美な埋葬を拒んでいた。にもかかわらず修道士たちは彼を説得し死後リンディスファーンへ移す事を承諾させている³⁴⁾。修道士たちは何故カスバートをリンディスファーンに埋葬する事に執着したのだろうか。

それには687年のカスバート退任の後に、リンディスファーン修道院が直面していた一つの危機が深く関わっていた。当時ノーサンブリアではエッグフリースによる追放から帰還したウィルフリッドが、ヘクサム、ヨーク、リボンさらにリンディスファーン司教を兼任した。しかしリンディスファーンの修道士たちにとって、ウィットビー公会議でコルマンを論破したウィルフリッドは、彼らの指導者として受け入れられる者ではなく、彼の司教在位はわずか1年であったが、この間の動揺はリンディスファーンの修道士たちに強い危機感を植えつけた³⁵⁾。新司教エアドベルト（Eadbert）の就任後、691年二度目の追放によってウィルフリッドの脅威は消えたが、彼の三度の復活を警戒した修道士たちは、不安定になった地盤を固め、一丸となってこの強敵と対峙するために何らかの策を考案せねばならなかった³⁶⁾。その時修道士たちが選択したのが、カスバートを聖人化し崇拝を発生させ、その保護の下で修道院が生き延びていく道だったのである³⁷⁾。

リンディスファーンのこの選択は、698年の聖体奉挙の儀式（Translation and Elevation）で公に示されたが、カスバートの棺を開け、遺骨を新しい棺に移し、教会の床の上に安置するこの儀式に関して、有名な奇跡の話が残されている。修道士たちがカスバートの遺骨を取り出すために棺を開けた時、彼の遺体は死後から11年を経たにもかかわらず乾いて朽ちている様子はなく、まるで生きているかのようにしなやかで、着ていた衣服も新しいままであったという。驚いた修道士たちは司教エアドベルトにその事を伝え、司教の指示に従って遺体に新しい衣服を着せて木の棺に再葬し、教会の内陣の床の上に安置した³⁸⁾。この朽ちない遺体の話は聖カスバートの奇跡を代表するもので、彼の聖性と神による加護を証明し、彼の名声と崇拝の拡大を促した。さらにこの際取り出されたカスバートの衣服、頭髮、靴などは聖遺物として墓所に祭られ、あるいはカスバートを信奉する修道院に分配され、様々な病気を癒したという奇跡も知られている³⁹⁾。また棺からは金とガーネットで作られた十字架など、様々な副葬品が発

見されており⁴⁰⁾、カスバートの埋葬は修道士たちによって周到に準備された崇拜発生の宣伝活動のひとつであったといえよう⁴¹⁾。カスバート崇拜はこうしたリンディスファーン側の積極的な働きかけの賜物であり、それは彼らの生き残りをかけた選択の結果であった。

では何故リンディスファーンの人々はカスバートを聖人に選んだのであろうか。そこにもウィルフリッドやローマ教会との敵対関係が見出される。ウィットビー公会議以降、リンディスファーンはローマ教会の新秩序への恭順を迫られ、修道士たちはローマ・ベネディクトゥス修道制に従う事を強要された。しかしメルローズ修道院でエイダンの弟子であるエータに学んだカスバートは、アイルランド修道制を受容した人物であった。そのため彼はリンディスファーンに赴いた後もローマ・ベネディクトゥスに従っていく事を説く一方で、エイダン以来のアイルランド修道制の伝統を崩す事はしなかった⁴²⁾。しかし彼自身はファーン島の庵で隠修士的修行に励むなど、終生禁欲的なアイルランド修道制を貫いている⁴³⁾。リンディスファーンの修道士たちは、アイルランドの伝統を内包し、一修道士としては断固としてそれを貫きながらも、司教としては大勢に背かず、伝統と新秩序を融合させていったカスバートの姿勢を、アイルランド教会とローマ教会の間で揺れるリンディスファーンに重ねていった。それ故にカスバートが聖人として選ばれたのではないだろうか。また生前から王権と親交があったカスバートを崇拜する事は、王家から多くの信奉者が集め、彼は王家の聖人とみなされるまでに至った⁴⁴⁾。こうして王権の支援を受けたカスバートの崇拜によって、リンディスファーンは王権との結合関係を継続的に確保し、ノーサンブリアにおける地位を不動のものにしていったのである。

一方、リンディスファーンの最大の敵であったウィルフリッドは、この状況に焦燥した。彼にとって王や司教たちに同調したリンディスファーンは敵であり、カスバートへの敵対心は強かった⁴⁵⁾。そこで彼はカスバート崇拜に対抗し自らの地位を確保するために、ノーサンブリア王族に信奉されたオズワルド崇拜に着目した。642年異教徒のマーシア王ペンダによって殺害されたオズワルドの遺体は、オスウィによって戦場マサーフェルス(Maserfelth)から移され、両腕はバンバラ王宮に頭部はリンディスファーンに運ばれ埋葬された⁴⁶⁾。その後これらの場所では、聖なる王の力による数々の奇跡が伝えられ、オズワルドの聖人

崇拝が発生した。この崇拝は王国間の争いや国内の不安定な情勢に対処するために、王族から聖人を輩出し、その信奉を通じて一族の結束を固めようとする意図を含んでいた⁴⁷⁾。この中でウィルフリッドは、オズワルドが戦勝を祈願して十字架を立て、後に癒しの奇跡が伝えられた聖跡ヘブンフィールド (Heaven-field) が、ヘクサム修道院の近郊にある事を利用して、オズワルドの祝祭日にヘクサムの修道士たちが徹夜の祈りを捧げる事を習慣化した⁴⁸⁾。さらにサセックスのセルシー (Selsey) 修道院でもオズワルドを祭った⁴⁹⁾。8世紀のオズワルド崇拝の飛躍的拡大はウィルフリッドと彼の後継者たちの尽力による所が大きく、結果オズワルドはノーサンブリアの一聖人からブリテン島を代表する聖人に成長した⁵⁰⁾。

しかしウィルフリッドの目的は、崇拝を利用して敵対勢力に対抗する事にあった。第一に、彼はオズワルド崇拝の支援をリンディスファーンに対抗する手段として利用した。オズワルド崇拝は彼と所縁が深く、頭部を安置するリンディスファーンが主導権を握っていたが、リンディスファーンでは教会の聖人を祭る事により重きが置かれ、オズワルド崇拝は積極的に展開されなかった。そのためウィルフリッドはヘクサムで盛大にオズワルドを祭り、リンディスファーンからオズワルド崇拝の場と王族の信奉者を奪う事を目的として、崇拝を支援した⁵¹⁾。また第二に、オズワルド崇拝の支援を通じて、彼はオズワルドの子孫や支持者に接近した。これはウィルフリッドが再び王家の人間をパトロンにつける事を可能にし、彼は王族と手を結んでノーサンブリアでの自分の地位を再建しようと努めた⁵²⁾。

しかしこのウィルフリッドの策は、王権との確執を深める結果となる。ウィルフリッドの協力によるオズワルドの名声の拡大は、オスウィの後継者たちに危機感を生じさせた。彼らは崇拝によりオズワルドの子孫が支持を集め、王権奪回に立ち上がる事を恐れていた。加えてオスウィ家と敵対し続けたウィルフリッドが、崇拝を通じて彼らと結託する事は避けるべき事態であった。その結果アルドフリースを後継したオスレッド (Osred) (在位705-716)の治世も、王家はウィルフリッドに強硬な姿勢を崩さず、両者の関係は修繕に至らなかった。またオズワルドの子孫との結託も彼の望むような成果をもたらさず⁵³⁾、ウィルフリッドは王権との友好的な結合関係を築けぬまま709年に没した。

ウィルフリッドの死後、彼の後継者たちはウィルフリッドが残した多くの問

題や対立によって、一門の存続の危機に直面していた。この危機にヘクサム司教を継いだアッカは、ウィルフリッドの莫大な財産と修道院を守るために、リボンに埋葬されたウィルフリッドの崇拜を積極的に展開した。これはかつてリンディスファーンの修道士たちがしたのと同じ選択であった。さらに彼らはウィルフリッド崇拜を、カスバート崇拜の手法を模倣して展開した。『聖ウィルフリッド伝』を記したステファヌス(Stephanus)は、705年頃にリンディスファーンの修道士たちが記した『聖カスバート伝』を手本としており、文章の形式や描かれている場面、癒しの奇跡の内容等に類似点が見られる⁵⁴⁾。しかしウィルフリッドはその信仰心や霊性が認められ崇拜を集めたというより、彼の生前の権威によって後継者たちのパトロンとされるために聖人化されている。そのためステファヌスは聖人伝の中で、ウィルフリッドの修道生活や信仰心よりむしろ世俗的な権力や、莫大な土地や財産の所有を強調している。このウィルフリッド崇拜の発生により、ノーサンブリア教会はカスバート支持派とウィルフリッド支持派に分かれて競い合ったが、結果的にはカスバート崇拜が反ウィルフリッド勢力の支持を得て圧勝し、ウィルフリッド崇拜は拡大の機会を逸した。その後も彼らは巻き返しを狙い、ノーサンブリア王権への接近をはかったが、王と対立したアッカが731年にヘクサムから追放されると、その後ウィルフリッドは彼の後継者の間でのみ崇拜されるに留まった⁵⁵⁾。

729年オスリック(Osric)(在位718-729)の暗殺によって、ノーサンブリアに約100年続いたアエセルフリース一族の統治は終わった。その後王位は別家系のケオルウルフ(Ceolwulf)(在位729-37)に継承されたが、リンディスファーンは新しい王家とも友好関係を築き、王権の支持を得てカスバート崇拜は一層の拡大をみた。730年頃司教イードフリース(Eadfrith)は崇拜の成長を刺激するために、カスバートの生涯と信仰、数多くの奇跡の逸話をまとめた聖人伝の執筆を、当代随一の知識人ベダ(Bede)に依頼した⁵⁶⁾。このイードフリースは、美しい装飾で知られる『リンディスファーン福音書』(The Lindisfarne Gospels)を製作した人物であり、この福音書は後に金や宝石で飾られた豪華な表紙がつけられ、カスバートの墓所に捧げられた⁵⁷⁾。こうした聖人伝や福音書の製作は、8世紀前半のカスバート崇拜の拡大を物質的に支えたものであり、同時に崇拜の恩恵によるリンディスファーンの繁栄と裕福さを象徴している。

またケオルウルフは737年に王位を退き、聖カスバートにその身を託すべくリンディスファーンで剃髪を受け修道士となったが、その際カスバートに所領や財産を寄進している⁵⁸⁾。この事は7世紀に見られた王権と教会との結合関係の変化を伺わせる。教会が王権に依存的であった両者の結合関係は、聖人崇拜を通じて王と教会が相互依存する関係へと移行していった。王はカスバートを信奉し彼に恭順を誓う事で権威と名誉を増し、リンディスファーンはカスバートに対する王の保護と寄進によって莫大な富を獲得したのである。

おわりに

7世紀末リンディスファーンにおける聖カスバート崇拜は、教会とノーサンプリア王権との結合関係と、断続的なウィルフリッドの脅威によって発生し確立された。カスバートは生前から世俗的な関心を持たず、信仰に生きた事で王権から支持を集めたが、彼の死後こうした王権による支援は、カスバートの崇拜の場であるリンディスファーンへの支援に転化された。しかしこれらの背景にはウィルフリッドとノーサンプリア王権の衝突があり、王権がウィルフリッドを敵対視した事で、カスバートが対抗馬として用いられたのであった。その結果、飛躍的に拡大したカスバート崇拜はウィルフリッドの脅威を退け、カスバートはノーサンプリアの守護聖人として8世紀の王権の安定に貢献した⁵⁹⁾。他方、カスバートによって活躍の場を奪われたウィルフリッドは、聖人として奉られたものの崇拜が拡大する事はなく、彼の名声は地域的なものに留まった。

以上のようにカスバートとウィルフリッドは死後の聖人崇拜において、大きく明暗をわかつ事となったが、その一因はウィルフリッドがカスバートより長く生きた事にあった。ウィルフリッドが権力に固執して王権との対立を続けていたこの22年の間に、カスバートは崇拜によって王権と結合し、ノーサンプリアに崇拜の地盤を固めていた。そしてウィルフリッド崇拜が発生した時には、カスバート崇拜は付け入る隙もないほどに発展を遂げ、ウィルフリッド崇拜の追隨を許さなかったのである。その結果死したカスバートが、権力に固執して生き続けたウィルフリッドを圧倒したのであった。

カスバート崇拝は8世紀後半以降、王や貴族から土地や教会の寄進を受けて一層領域的拡大をみせる。さらにその過程では9世紀にはウェセックスのアルフレッド (Alfred) やエセルスタン (Aethelstan) 等からも寄進や信奉を集め、その後のブリテン島の統一と共にカスバートの名声も全域に広がっていった。こうした崇拝の拡大に関する諸問題の具体的検討を今後の課題としたい。

注

- 1) Thacker, A., 'The Making of a Local Saint', Thacker, A. & Sharpe, R. (eds), *Local Saints and Local Churches in the early Medieval West*, Oxford, 2002, pp.46.
- 2) *Bretwalda*はアングロ・サクソン年代記827年の記録に見られる。*Baedae Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum*, King, J. E. (trans.), *Baedae Opera Historia*, 2vols, London, 1930, II-5, (以下HEと略記); Kirby, D. P., 'Northumbria in the Time of Wilfrid', Kirby, D. P. (ed.), *Saint Wilfrid at Hexham*, Newcastle, 1974, pp.7.
- 3) HE III-3, 5.
- 4) 当時リンディスファーンでは修道院と教区教会の区別が明確ではなく修道院長が司教を兼任していた。

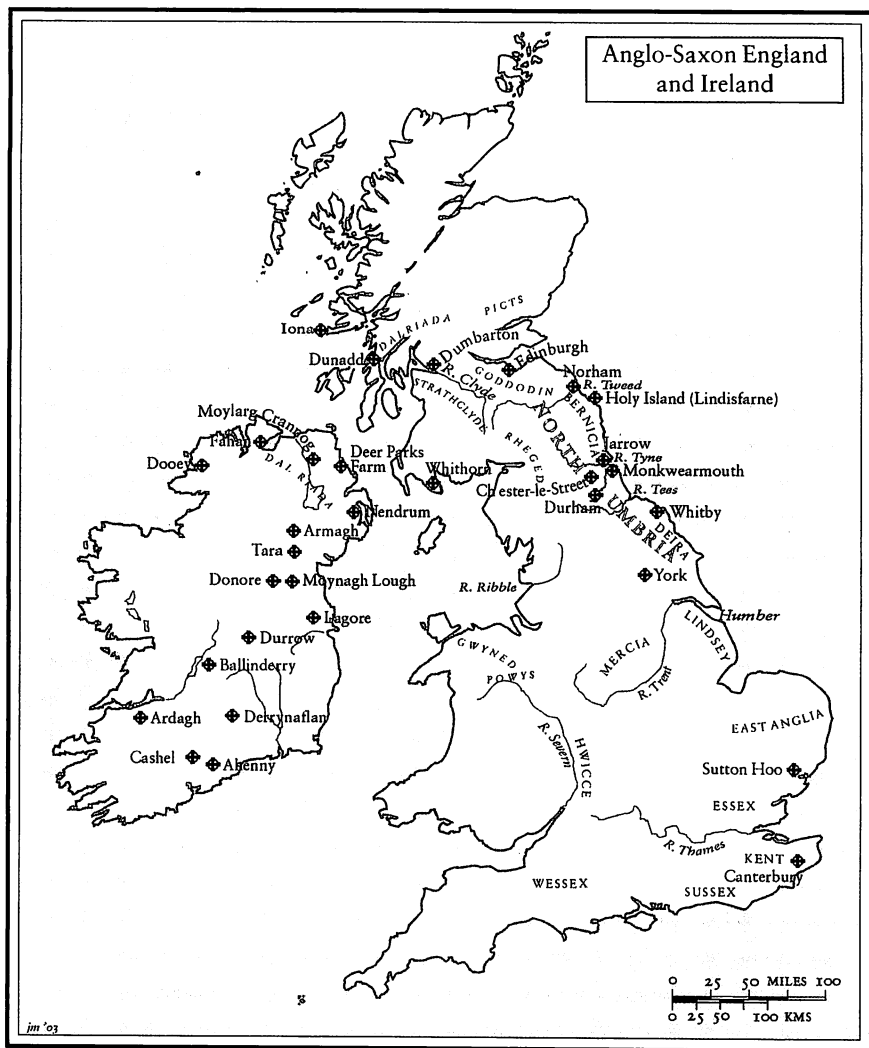
Blair, P. H., *Northumbria in the Days of Bede*, New York, 1976, pp.111-112; Thacker, A., 'Lindisfarne and the Origins of the Cult of St Cuthbert', Bonner, G., Rollason, D. and Stancliffe, C. (eds.), *St Cuthbert, his Cult and his Community to AD 1200*, Woodbridge, 1989, pp.104; 安孫子郁子, 「7-8世紀ノーサンブリアと聖カスバート崇敬の発生」, 梶山義夫, 杉崎泰一郎編『歴史と霊性』, 創文社, 2000, pp.71-89.
- 5) アイルランド教会の発展については以下を参照。

Gougaud, D. L., *Christianity in Celtic Lands, A History of the Churches of the Celts, their Origin, their Development, Influence and mutual Relations*, London, 1932; Herbert, M., Iona, Kells and Derry, *The History and Hagiography of the Monastic Familia of Columba*, Oxford, 1988.
- 6) ノーサンブリアはエドウィン治世にパウリヌスによるローマ教会の洗礼を受けたが、エドウィンの死後に異教に復帰していた。HE II-14, III-1.
- 7) HE III-25; *Vita Wilfridi Episcopi Auctore Eddio Stephano*, Raine, J. (ed.), *The Historians of the Church of York and its Archbishops*, t. 1, London, 1965, 10, (以下VW); Kirby, 'Northumbria in the Time of Wilfrid', pp.8.
- 8) HE III-26.
- 9) HE III-28; IV-3; Kirby, *The Earliest English Kings*, London, 2000 (2), pp.90.
- 10) アルフリースは先にエータにリポンを与えていたが、これを撤回し660年頃ウィルフリッドに譲渡した。

HE III-25; *Vita Sancti Cuthberti Auctore Beda, Bede's prose Life of St Cuthbert*, Colgrave, B. (ed. & trans.), *Two Lives of Saint Cuthbert*, Cambridge, 1940, 7, (以下VCP).
- 11) HE III-14; Kirby, *The Earliest English Kings*, pp.88.

- 12) *VW* 11; Roper, M., 'Wilfrid's Landholdings in Northumbria', Kirby, D. P. (ed.), *Saint Wilfrid at Hexham*, pp.61
- 13) この5つの小教区の内リンドシー（司教エアドヘッド）とアベルコーン（司教トゥルワイン Trumwine）は戦争による獲得地であり、流動的で短命に終わる。その他は長命でヘクサムはタンベルトが[§]、リンディスファーンはエータが[§]、リポンはリンドシー領を失った後エアドヘッドが司教となった。*HE* IV-12, 26.
- 14) Kirby, 'Northumbria in the Time of Wilfrid', pp.12.
- 15) *HE* IV-13, 16; Roper, *Op.cit.*, pp.61.
- 16) *HE* IV-27; *VCP* 6.
- 17) *HE* III-26, IV-27; *VCP* 16; *Vita Sancti Cuthbert Auctore Anonymo, the anonymous Life of St Cuthbert*, Colgrave, B. (ed. & trans.), *Two Lives of Saint Cuthbert*, Cambridge, 1940, III-1, (以下*VCA*).
- 18) *HE* IV-28; *VCA* IV-1; *VCP* 25.
- 19) *VCA* IV-2; *VCP* 26.
- 20) *VW* 44, 45.
- 21) *VW* 64.
- 22) *VW* 27, 47; Kirby, 'Northumbria in the Time of Wilfrid', pp.16.
- 23) 安孫子郁子, 前掲書, pp.71-89.
- 24) *VW* 24; Roper, *Op.cit.*, pp.63.
- 25) Yorke, B., *Kings and Kingdoms of early Anglo-Saxon England*, London, 1990, pp.78-79.
- 26) *HE* III-28; Kirby, *The Earliest English Kings*, pp.88-89.
- 27) ウィルフリッドはエッグフリースに投獄された時に、彼のデイラ王家との親交を知る王の伯母のアエベ（Aebbe）は彼を逃がし、殺害の危機を救った事が知られている。アエベもまたデイラ王家を支持していた。*VW* 39; Kirby, *The Earliest English Kings*, pp.92.
- 28) *VCA* III-6; *VCP* 24.
- 29) 安孫子郁子, 前掲書, pp.78; Kirby, *The Earliest English Kings*, pp.92.
- 30) *HE* IV-26.
- 31) *Historia de Sancto Cuthberto, A History of Saint Cuthbert and a Record of His Patrimony*, South, T. J. (ed. & trans.), Cambridge, 2002, 5, (以下*HSC*).
- 32) 安孫子郁子, 前掲書, pp.76.
- 33) *VCA* IV-13; *VCP* 40.
- 34) *HE* IV-29; *VCP* 37.
- 35) *HE* IV-29; *VCP* 40.
- 36) Thacker, 'Lindisfarne and the Origins of the Cult of St Cuthbert', pp.116.
- 37) Kirby, D.P., 'The Genesis of a Cult: Cuthbert of Farne and Ecclesiastical Politics in Northumbria in the Late Seventh and Early Eighth Centuries', *The Journal of Ecclesiastical History*, t. 46-3, 1995, pp. 395; 安孫子郁子, 前掲書, pp.76.
- 38) *HE* IV-30; *VCA* IV-14; *VCP* 42.

- 39) *HE* IV-31, 32; *VCP* 45.
- 40) Thacker, 'Lindisfarne and the Origins of the Cult of St Cuthbert', pp.105; Battiscombe, C. F., *The Relics of Saint Cuthbert*, Oxford, 1956, pp.99-114.
- 41) Thacker, 'The Making of a Local Saint', pp.61.
- 42) *HE* IV-27.
- 43) アイルランド修道制とカスパートに関する研究は以下参照。
Mitton, M., *The Soul of Celtic Spirituality in the Lives of its Saints*, London, 1996, pp.28-33 ; Cavill, P., *A Treasury of Anglo-Saxon England*, London, 2001, pp.175-195.
- 44) Thacker, 'Lindisfarne and the Origins of the Cult of St Cuthbert', pp.112 ; Rollason, D., *Saints and Relics in Anglo-Saxon England*, Oxford, 1989, pp.114-115 ; Brown, M., *The Lindisfarne Gospels, Society, Spirituality and the Scribe*, London, 2003, pp.64.
- 45) Rollason, *Op.cit.* , pp.112-113.
- 46) *HE* III-9 ; Thacker, A., 'Membra Disjecta : the Division of the Body and the Diffusion of the Cult', Stancliffe, C. & Cambridge, E. (eds.), *Oswald : Northumbrian King to European Saint*, Stamford, 1995, pp.100.
- 47) 中世初期ブリテン島では異教徒による殺害や陰謀による暗殺にあった王を殉教者として聖化した例が見られた。青山吉信, 『聖遺物の世界』, 山川出版社, 1999, pp. 38-42.
- 48) *HE* III-2.
- 49) ヘクサムでのオズワルド崇拝の発生はウィルフリッドの晩年、アルドフリース王の没年705年以降に始まったとされる。Kirby, *The Earliest English Kings*, pp.26-27 ; Thacker, 'Membra Disjecta', pp.109.
- 50) Thacker, 'Membra Disjecta', pp. 107-110 ; Cubitt, C., 'Universal and Local Saints in Anglo-Saxon England', Thacker, A. & Sharpe, R. (eds), *Local Saints and Local Churches in the early Medieval West*, pp.423-453.
- 51) Thacker, 'Membra Disjecta', pp.101-102 ; Cubitt, *Op.cit.* , pp.451-452.
- 52) Kirby, 'Northumbria in the Time of Wilfrid', pp.26-28.
- 53) オズワルドの子孫Eadwulfはオスレッドと王位を争ったが、その際彼はウィルフリッドの支持を拒んでいる。Kirby, 'Northumbria in the Time of Wilfrid', pp.10, 28.
- 54) Brown, M., *The Lindisfarne Gospels*, pp.65.
- 55) Kirby, 'Northumbria in the Time of Wilfrid', pp.24 ; Rollason, *Op.cit.* , pp.111-113.
- 56) Thacker, 'Lindisfarne and the Origins of the Cult of St Cuthbert', pp.119-121 ; Kirby, 'The Genesis of a Cult', pp.396.
- 57) 『リンディスファーン福音書』の製作年には諸説あるが、聖体奉挙 (698) から司教イードフリースの死去 (721) までの期間か、あるいは720年代と見なされている。
Brown, M., *Das Buch von Lindisfarne, Cotton MS Nero D.IV der British Library, London, Kommentarband I* , Luzern, 2002, pp.191 ; Brown, M., *The Lindisfarne Gospels*, pp.104-110.
- 58) *HSC* 8.
- 59) Rollason, *Op.cit.* , pp.121.



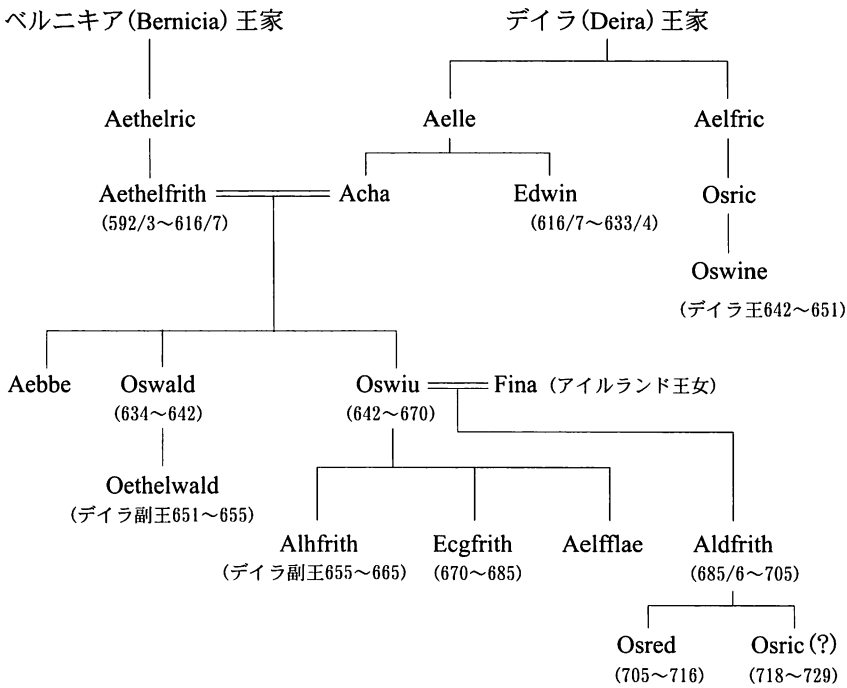
Map of Britain and Ireland in the 8th century. (Map by Joho Mitchell)



Map of Northumbria in the 8th century, after Hawkes, 1996. (Map by Joho Mitchell)

Brown, M., *The Lindisfarne Gospels, Society, Spirituality and the Scribe*, London, 2003, pp.2,3より掲載.

7 世紀～ 8 世紀ノーサンブリア王家系図



※ () 内の数字は王の在位期間。
※ OsricはあるいはAlhfrithの子であると考えられている。

Yorke, B., *Kings and Kingdoms of early Anglo-Saxon England*, London, 1990, pp.76; Kirby, D.P., 'Northumbria in the Time of Wilfrid,' Kirby, D. P.(ed) , *Saint Wilfrid at Hexham*, Newcastle, 1974, pp.18.より作成。